

「人は道に育ち地の性あり」

⑬ 「人類完成の歡び」 より

萬物はすべて太陽・太陰・大地の三つの血によって育てられているから、これを三血みち即ち道という。天・地・萬物の三つを総合したものが宇宙であり、月日と地の血の精を受けている人であることを自覚しなければならぬ。人を宇宙の靈魂たましいという。換言すれば神靈の厚徳を受けている人ということになる。この故に宇宙大精神を心得て、神の御活動を理解する神人合一の人となることが理想である。神人合一して人は萬物の靈長といわれる資格を持つ。天の使命は人に、宇宙大御祖おおみおやの御意思に従って生活する力を與えられていることにある。人はこの天の使命を理解して、極徳を得て生きることが心がけねばならない。

地が主体となり、日月の力で萬物を育てられている。一本の草でも地によって芽生え、生長する力は日に照らされ、水分は月によって調節されている。人もまた地の性質を享けて生まれていることを自覚しなければならぬ。毛は草木であり、皮膚が地面であり、血管が川に当り、神経が道である。齒や骨は岩石であり、肉體は土地に相当する。身體にも水田や畑にたとへべき個所がある。これは人が地の性質を帯びているからである。

人種が異なるのは国によって国の地(血)を受け、その土地に馴染んだ人が生れ、體質その他を異にすることになる。子が親に似て生れるのは親の血を受けるからである。大地の血を受けるから、人種が異なってくるのである。地は血であり、血は靈ちである。

土地の精神的御祖みおやをわが国では産土神うぶすまと申し上げている。その町や村の土を産んで下さった御働きであり、土と化した靈であり、また町民・村民一切に衣食住を恵み給う地(血)の御働きであり、御力であり、その厚徳を神と讃えて産土神という。産とは結ぶことであり、結ぶとは神と人と結んだことをいう。産土の基は素スであり、神である。結びはたましいであり、人が生れる時は産土神より魂が與えられる。人は神に結ばれて生れるから、その地に馴染んだ姿で生まれる。